

- 登場人物の描写（言葉やエピソード）からその人物像（生き方や考え方）を、捉えよう。
- 捉えた人物像について自分なりに考え、それを文章にまとめよう。↓「ルロイ修道士への弔辞」

第一の部分を整理しよう（P. 18、L. 10）

場 所 上野公園の西洋料理店

時 季

葉桜にはまだ間があるころ

登場人物

ルロイ修道士

と

● 達者

な日本語

● 昭和十五年の春から日本暮らし

わたし

● 「今度故郷へ帰る。」

さよならを言うために、皆さんに会って回っている。」

★主人公はどっち？

第二の部分(前半)を構成的に読もう

(P. 18、L. 11～P. 24、L. 4)

人物像についての考え

第一の層 「再会時」

第二の層 「回想(エピソード)」

思考メモ

ルロイ修道士

わたし Ⅱ 思わず顔をしかめた

「天使の十戒」(べからず集)

天使園に収容されたときの光景

机越しに

「ここがあなたの家です」

万力よりも強く

腕を 勢いよく 上下させる

ひじがぶつかって、腕がしびれた

実際に 穏やかな握手

病人の手でも握るように

ル 「おいしそうですね」

・ 園長でありながら、子どもたちの食料を作ることに精を出していた

彼の手はいつも汚れており、

てのひらは 櫛の板でも

はったように固かった

もう ギチギチとは 鳴らない

両の手のひらを 擦り合わせる

よく 鳴った

わ 「左の人さし指は、相変わらず

不思議なかつこう をしていますね」

見せしめにたたき潰された

わ 「申し訳ありません」

指の爪は潰れており、鼻くそを丸めたようなものがこびりついている

うわさー

心の底では日本人を 憎んでいる

★ しかし、いつまでたっても 優しかった

うわさ2

アメリカの サーカスに売る

★ あんなに うれしそうに 眺めている

先生をほんの少しでも疑っては罰が当たる

すぐ立ち消え

- 登場人物の描写（言葉やエピソード）からその人物像（生き方や考え方）を、捉えよう。
- 捉えた人物像について自分なりに考え、それを文章にまとめよう。↓「ルロイ修道士への弔辞」

第二の部分（前半）を構成的に読もう

（P. 18、L. 11～P. 24、L. 4）

第一の層 「再会時」	第二の層 「回想（エピソード）」	思考メモ
わ 「申し訳ありません」 ル 「日本人を代表してものを言ったりするのは 傲慢。 …… 一人一人の人間が、 それだけのこと」 わ 「わかりました」 ル 「おいしいですね」 わ はてな と首をかしげた オムレツをちつとも口へ運んでいない ル 「それよりもあなたに ひどい仕打ちを しませんでしたか。もし、していたなら、 謝りたい」 わ 「一度だけぶたれました」 ル 悲しそうな表情になって 「やはりぶちましたか」 ル 改めて ただし、顔は笑っていた	右の人さし指を ぴんと立てた 右の親指を立てた 両手の人さし指をせわしく交差させ、 打ちつけている 「こら」とか 「よく聞きなさい」の代わり 「わかった」「よし」 「最高だ」の代わり 危険信号 「お前は悪い子だ」 平手打ちが飛ぶ 。無断で天使園を抜け出して東京へ 。靴下や下着を闇市で売った	

平手打ちは、飛んでくる？ 来ない？

第二の部分（後半）をルロイ修道士と「わたし」の描写に着目して読もう

（P. 24、L. 5～P. 28、L. 2）

わ た し	ルロイ修道士	思考メモ
「どこかお悪いんですか」 「まあまあ」	「少し疲れたのでしょうか」 「仕事はうまくいっていますか」 「よろしい」 右の親指を立てた	
冗談じゃないぞ。 さっきの握手もなんだか変だった。 引用（P. 16 L. 2） 病人の手でも握るように」	「困難は分割せよ」	
遺言みたい		

- 登場人物の描写（言葉やエピソード）からその人物像（生き方や考え方）を、捉えよう。
- 捉えた人物像について自分なりに考え、それを文章にまとめよう。↓「ルロイ修道士への弔辞」

第二の部分（後半）をルロイ修道士と「わたし」の描写に着目して読もう（P. 24、L. 5～P. 28、L. 2）

わたし	ルロイ修道士	思考メモ
。実は ルロイ修道士が病人 なのでは 。この世の いとまづい に 訪ね歩いているのでは 。これは お別れの儀式 なのですね ときこうとしたが、さすがにはばかられ 「楽しかったことは」 	「天使園で育った子が、一人前の働きを しているのを見るときが いっとう楽しい」 。上川君のエピソード 〓 右の親指をぴんと立てた 「天使園で育った子が、自分の子を預ける ために長い坂をとぼとぼ上がってやって来る それを見るとき」 「汽車が待っています」 掲げた 右の人さし指に中指をからめて ＝ 幸運を祈る・「しっかりおやり」 「死ぬのは怖くありませんか」 上野駅の中央改札口の前、思い切って 「本当に天国がありますか」 ルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った それでも足りずに、 右の親指を立て 「腕を上下に激しく振った。」 「痛いですよ」 顔をしかめてみせた 「あると信じるほうが楽しい でしょうが」 「そう怖くはありませんよ」 いたずらをしたときに見つかったときにした ように少し赤くなって頭をかいた	

《それでも足りずに振った》について

Q1. 《それでも足りずに》と描写されているが、何が足りなかったのだろうか？

ルロイ修道士への思い（感謝・信頼・愛情）を込めるにはただの握手では足りない

Q2. 「わたしの」この動作は？

ルロイ修道士の握手と同じ

- 登場人物の描写（言葉やエピソード）からその人物像（生き方や考え方）を、捉えよう。
- 捉えた人物像について自分なりに考え、それを文章にまとめよう。↓「ルロイ修道士への弔辞」

第三の部分（P. 28、L. 3 おわり）

○上野公園の葉桜が終わる頃

ルロイ修道士は仙台の修道院で

なくなった。

まもなく「一周忌」である。↑物語の時制を確認

○わたしたちに会って回っていたころのルロイ修道士は、身体じゅうが悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。

↓わたしは知らぬ間に、

両手の人さし指を交差せ、せわしく打ちつけていた。

「先の握手と同様に、これもルロイ修道士の仕草。ルロイ修道士が「わたし」の中に生きていることに気付かせるこのときのわたしの気持ちを考えてみよう。〔個人↓ユニット〕

あなたの考え			みんなの考え		
			「怒り↑誰に対して?」「ルロイ修道士・自分		

「ルロイ修道士への弔辞を書こう。

お葬式などで、故人の死を悼み、故人を送る言葉

- 1. 「弔辞」とは、
- 2. 「弔辞」の要素

(1) 故人とは、どんな人であったか。↑他の人に伝えるべき姿として

○ 「誰々は、何々な人だと思います」弔辞には個人の人生を総括する側面がある。

○ 「彼はくでした」はつきり存在証明をしてあげることが、故人への礼儀であり責任である。

○ 故人の人生を深いところで受け止めてあげることが本当の供養になるのではないか。

◆ 故人を何かのイメージにたとえて描写する。

(2) 自分とのかかわりの中の、故人の人物や考え方・生き方のわかるエピソードを述べる。

○ 故人の呼び方に関わりの深さが表れるし、その死を悼む真心がこもる。

○ 「あの瞬間の君が忘れられない」「あのとき思っていたことを、どうしても今伝えたい」

○ 自分にとって特別な印象を残した瞬間を切り取って述べる。

○ 故人の発した重要な言葉を紹介する。

(3) 故人が世の中や周りの人々に与えた影響・功績。

○ 具体的なエピソードを織り交ぜて紹介する。

(4) 故人の遺志に寄り添う。

○ 故人が生きていたら何というか（思うか）を考える。

○ 「故人からこんな思いを引き継いだ」

(5) 自分の故人への思いを述べる。

○ 喪失した気持ちを素直に言葉にする。

○ 「この人があったから今の自分があります」感謝の気持ち



★ルロイ修道士がどんな人だったか、それがわかるエピソードを交えて書く。

★抽象的概念を表す語句を使う。
↓
P. 247
QR コード

★「わたし」のルロイ先生への思いを書く。

○誤字・脱字、表現上のミス等は減点。

○20行以上（20行目に入る）23行以内で。

●一文は短く。

●段落意識を持って書く。

- 原稿用紙の正しい使い方を書く。
- 提出期限を守って出そう。



ここから書く

吊
辞

5

10

15

20

5

10

15

20

23

○弔辞の例―「藤原竜也から蜷川幸雄」



「その涙は嘘っぱちだろ？」と怒られそうですけど、短く言ったら長く言え。長くしゃべろうとすれば、つまらないから短くしろと怒られそうですけど。まさか僕がきょうここに立つことになるうとは、自分は想像すらしてませんでしたよ。最期のけいこというか、言葉で弔辞。五月十一日、病室でお会いした時間が最期になってしまふとは……。

先日、公園で一人『ハムレット』のけいこの録音テープを聞き返していましたよ。恐ろしいほどのダメ出しの数でした。瞬間にして心が折れました。

「俺のダメ出しでお前に伝えたことは全て言った。今は全て分かうとしなくていい。いずれ理解できる時がくるから、そうしたら少しは楽になるから。アジアの小さな島国の小さい俳優になるなど。もっと苦しめ、泥水に顔をツツコんで、もがいて、苦しんで、本当にどうしようもなくなったときに手を挙げる。その手を俺が必ず引っ張ってやるから」と蜷川さんそう言っていましたよ。

蜷川さん、悔しいでしょう、悔しくて泣けてくるでしょう。僕らも同じですよ。もっと一緒に居たかったし、仕事もしたかった。たぐさんの先輩方、同志の方々がたくさんきてますね。蜷川さんの直接の声は、もう心の中でしか聞けませんけれども、蜷川さんの思いをここに在る皆でしっかりと受け継いで頑張っていきたいと思います。

気を抜いたら、バカな仕事をしてたら、怒ってください。一九九七年、蜷川さん、あなたが僕を産みました。奇しくもきのうは僕の誕生日でした。十九年間、苦しくも……、まあぼぼ憎しみしきないですけど、最高の演劇人生をありがとうございました。蜷川さん、それじゃあまた。

○弔辞の例2「小栗旬から蜷川幸雄」

昨日の晩、鋼太郎さんが「蜷川さんは台本を持つのが嫌いな人だから、俺たち弔辞は読まずにいこう」と言ったのに、今日鋼太郎さんが読んでいたので、僕も読ませていただきます。

僕がこんなところに立って、蜷川さんに何かを言うって、きっと「ばか小栗、

お前に言われることなんて何もねえよ」って笑われちゃいますね。いろいろ考えたんですが、あまり堅苦しくても碎けすぎても怒られそうなので、なんとなくいきます。蜷川さん、どうします？ 予定してた僕との公演。嫌われて、俺も勝手に嫌って、仲直りしてもらって、やっと一緒にできると思っていたのに、あんなにしっかりと握手もしたのに、約束したのに、悔しいです。蜷川さんと過ごさせていた日々のことをたくさん思い出していました。なぜでしょうね。輝かしい思い出の日常のほずなのに、怒られたことばかり覚えてます。「本当にお前みたいな不感症とは二度と仕事したくない。下手くそ、雰囲気、単細胞、変態、はー、きみおじさんになったね？ なんかデブじゃない？ デブだよ、デブ。なあ（宮沢）りえちゃん、そう思わない？ ピスタチオみたいな顔」。あ、最後のは（藤原）竜也に言われた言葉でした。もっとうまい文句もいろいろ言われたんですけど、そのへんは右から左に流していたんで忘れちゃいました。

先日、もう会うことのできなくなっちゃった晩、いてもたってもいらなくなった数人が集まり、蜷川さんとの思い出話に花を咲かせました。そのとき、「やっぱ僕らは蜷川幸雄という人間を中心にした、大きな劇団の一員だよな」という話になりました。本当にそう思います。なぜならそれぞれが蜷川さんの優しさ、心配りを感じているからだと思います。僕をこの劇団に入れてくれて、「なんでみんな小栗のカッコよさに気づかないんだろうな？ 大丈夫。絶対俺が伝えてやる」と言って、見たことのない数々の景色に連れて行ってくれて、信じてくれて、ありがとうございます。今僕がこの場所にこうして立っているのは、間違いなく蜷川さんの劇団の一員にもらったお陰です。まだ僕はちよつと若いので、会いに行くのはまだまだしばらくかかってしまうと思いますが、僕が会いに行くまでにそつちで新しいハムレットの演出を考えてみてください。その日に「駄目になったな」と言われないうちに僕は僕で、こちらで苦しんでみようとします。でも不安だから、時々でいいからこっそり夢にでも叱りに来てくださいます。休むのが嫌いな蜷川さんだったから、きつとゆっくりなどしてないと思うけど、少しはゆつくり休んでください。僕の生意気をいつも受け止めてくれてありがとうございます。とことん踊らせてくれてありがとうございます。道を照らし続けてくれて、本当にありがとうございました。



○弔辞の例3「加藤茶から志村けん」



弔辞

志村、ひどすぎるぞ、おまえ。一番若いおまえが俺たち差し置いて天国に逝っちゃうなんてなあ。まだ、俺たちと一緒にやらなきゃならないことがたくさんあっただろ。それを勝手に一人で先に逝っちゃうなんて、おまえはバカだよ。天国の長さんも、まさか、おまえが最初に来るなんて思ってたかったらうな。ビックリしたと思うよ。長さんの次は高木ブーだと思っていたもんな。でも、久しぶりに二人っきりでいろんな話ができるから、長さんも喜ぶんじゃないかな。まあ、いずれそう遠くないうちに俺たちもそっちに行くと思うから、それまで長さんと酒でも酌み交わしながら、ドリフの新しいネタでも考えようくれよ。五人がそっちに全員集合したら、そっちのお客さんを大爆笑させようぜ。約束だぞ。じゃあ、それまでゆつくりと休んでくれ。

大好きな志村へ

加藤 茶



○弔辞の例3



八月二日にあなたの訃報に接しました。六年間の長きにわたる闘病生活の中で、ほんのわずかではありますが回復に向かっていたのに、本当に残念です。

《中略》

何年か過ぎ、私がお笑いの世界を目指して九州から上京して、歌舞伎町の裏の小さなバーでライブみたいなことをやっていた時に、あなたは突然私の眼前に現れました。その時のことは今でもはっきり覚えています。赤塚不二夫が来た。あれが赤塚不二夫だ。私を見ている。この突然の出来事で、重大なことに、私はあがることすらできませんでした。終わって私のところにやってきたあなたは、「君は面白い。お笑いの世界に入れ。八月の終わりに僕の番組があるからそれに出ろ。それまでは住むところがないから、私のマンションにいろ」と、こう言いました。自分の人生にも他人の人生にも影響を及ぼすような大きな決断を、この人はこの場でしたのです。それにも度肝を抜かれました。

《中略》

あなたは私の父のようであり、兄のようであり、そして時折見せるあの底抜けに無邪気な笑顔は、はるか年下の弟のようでもありました。あなたは生活すべてがギャグでした。たこちゃん（たこ八郎さん）の葬儀の時に、大きく笑いながらも目からはぼろぼろと涙がこぼれ落ち、出棺の時、たこちゃんの額をびしゃりと叩いては、「この野郎、逝きやがった」と、また高笑いしながら大きな涙を流していました。あなたはギャグによって物事を動かしていったのです。

あなたの考えはすべての出来事、存在をあるがままに前向きに肯定し、受け入れることです。それによって人間は、重苦しい陰の世界から解放され、軽やかになり、また、時間は前後関係を断ち放たれて、その時、その場が異様に明るく感じられます。この考えをあなたは見事に一言で言い表しています。すなわち、「これでいいのだ」と。

《中略》

あなたは今この会場のどこか片隅で、ちょっと高い所から、あぐらをかいて、ひじを付き、ニコニコと眺めていることでしょう。そして私に「おまえもお笑いやってるなら弔辞で笑わしてみろ」と言ってるに違いありません。あなたにとって死も一つのギャグなのかもしれません。

私は人生で初めて読む弔辞が、あなたへのものとは夢想だにしませんでした。私はあなたに生前お世話になりながら、一言もお礼を言ったことがありません。それは肉親以上の関係であるあなたとの間に、お礼を言う時に漂う他人行儀な雰囲気がたまらなかったのです。あなたも同じ考えだということを、他人を通じて知りました。しかし、今、お礼を言わせていただきます。赤塚先生、本当にお世話になりました。ありがとうございました。私もあなたの数多くの作品の一つです。合掌。



平成二十年八月七日、森田一義